

ブラジルの日系青年団体における新しいエスニシティ : サンパウロの事例から

山ノ内, 裕子
九州大学大学院人間環境学府 : 研究生

<https://doi.org/10.15017/7364832>

出版情報 : 国際教育文化研究. 3, pp.103-114, 2003-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



ブラジルの日系青年団体における新しいエスニシティ

——サンパウロの事例から——

山ノ内 裕子

0.はじめに

拙稿[山ノ内 2002]において、筆者はグローバリゼーション状況の今日、ブラジルの若い世代の日系人たちの間で、“Nikkei”という新しいエスニシティが表れていることを明らかにした。それは「ジャポネース (japonês: 日本人、日系人) かブラジレイロ (brasileiro: ブラジル人) か」という二者択一的なエスニシティのありかたではなく、日系社会の外部においても、またその内部においてもさまざまな「他者」を抑圧しない新しい形のエスニシティの台頭である。そこで本稿では、1998年12月から2002年3月までの間、計4回、のべ20ヶ月の間ブラジル連邦共和国サンパウロ州で行った二つの日系青年団体での参与観察の結果をもとに、具体的な民族誌的データに基づいて、日系青年団体の諸活動に見受けられる新たなエスニシティの表出過程を明らかにすることとする。

1. セイネンブンキョウ

セイネンブンキョウは1997年2月に設立された日系青年団体である。ブラジルの主たる日系団体のひとつであるサンパウロ日本文化協会（通称「文協」）のY会長（当時）の呼びかけで、文協青年部として設立されたが、会の運営そのものは「セイネンブンキョウ (seinenbunkyo)」として独立している。Y氏は「年寄りの団体」と思われがちな文協に若い世代の人々を引き寄せるために、既に日系社会においてリーダー的存在であった初代会長やその仲間たちに声をかけ、文協青年部の発足を支援した。その後、初代会長や、二代目会長は現役を引退し、相談役的ポジションについている。現在の役員はほとんどがセイネンブンキョウの発足後に加入した人々であり、創立時のメンバー（現在30歳前後）より5～10歳は若い。現在は、セイネンブンキョウは文協からは独立して、役員の選出や会の運営、会計を独自に行っている。発足時から数えて、現在の会長は第6代目に当たる。2003年1月現在、日常的に活動に参加しているのは49名であるが、他にも94名が名簿に名前を記載している。

また、セイネンブンキョウが現在掲げている目標は、『日系ブラジル文化』の価値を普及・促進させることと、「各日系団体に所属する若い世代の日系人たちの連帯を促進・発展させること」である。こうした目標を達成するため、セイネンブンキョウは、日系社会における奉仕

を活動内容の一つとして掲げており、母体であるサンパウロ日本文化協会の各種行事を積極的に手伝っている。例えば文協が主催する慈善バザーや桜まつりでは、会場の設営や飲み物の販売など裏方的な仕事を引き受けている。また、文協のみならず、日系の福祉施設や老人ホームでのボランティア活動にも積極的に加わっている。

一方、若い世代の連帯のために、セイネンブンキョウは Revitalização（日系団体青年リーダー会議）を中心となって組織している。これは、セイネンブンキョウが発足する前、すなわち1995年から毎年5月に開催されているもので、各地の日系青年団体の代表が、サンパウロ市郊外の宿泊施設に一堂に会し、寝食をともにして議論するものである。2002年度は120人が参加して、日系社会における青年たちの役割について議論した。また、サンパウロの主要日系青年団体、すなわちセイネンブンキョウに加えて、日本での留学や研修の経験を持つ人々たちのOB会であるASEBEX（次節にて後述）、貧困地域での巡回医療活動を行うABEUNI¹、そして実業界でのリーダーを目指す日系人の若者たちによって構成されている日本ブラジル青年会議所（Câmara Júnior Brasil-Japão）は日系の若者たちからは“G4”と呼ばれているが、セイネンブンキョウはG4の各団体とは特に密接に交流を深めている。

以上がセイネンブンキョウの概略である。筆者はブラジル滞在中、セイネンブンキョウにてメンバーのひとりとして参加し、参与観察を行った。以下の記述は筆者の体験に基づくものである。

前々からセイネンブンキョウに関心を持っていた筆者が同グループの門を叩いたのは、ちょうどセイネンブンキョウがインターネットのホームページを開設し、入会希望者のために毎月1回、定例説明会を始めた2002年1月である。筆者は直接事務所に outgoing、帰国までの2ヶ月半、参与観察したい旨を告げた。すると「ちょうど今週の土曜日、入会説明会があるから、そのときに来るといいよ」と言われ、筆者は土曜日に改めて足を運ぶことになった。

説明会は2001年11月から始められた試みで、毎月第一土曜日に行っているという。この日の説明会は第3回目であったが、ホームページを開設してからは初めての説明会であった。当日は、筆者を入れて合計22人の申込者があった。ほとんどがセイネンブンキョウのホームページを見て興味を持った人たちであった。説明会は和やかな雰囲気が進められた。現メンバーたちは簡単な自己紹介とともにセイネンブンキョウに入ったきっかけを語り、この日初めて参加した入会希望者たちは、自己紹介とともに、セイネンブンキョウを知ったきっかけと入会希望の動機を話すことを求められた。

自己紹介で興味深かったのは、現メンバーたちの入会のきっかけである。現メンバーはみな、個人的なネットワークで加入しているのである。つまり、既に会員となっている人に誘われて加入しており、そして入会後に友人を誘うといった形である。しかし、当日説明会に参加した人のほとんどが、「ホームページを見て興味を持った。現メンバーとは面識はない」と語っていた。またその他の入会動機としては、「日本文化に興味がある」「日本に留学していて、日系の青年会活動に興味を持った」「新しい友達が欲しい」「友達に誘われて一緒に来た」といった声が聞かれた。なかには「今日はたまたまサンパウロの友人を訪ねてこちらに来ている。前から

興味があったので、今日は参加してみた」と隣のパラナ州から参加した人もいた。

自己紹介の後、現メンバーがセイネンブンキョウの趣旨や歴史、活動内容を、パソコンのプレゼンテーションソフトを用いながら説明した。また、同時に、これまで様々なイベントで撮影した写真が回覧され、入会希望者たちは現メンバーたちからセイネンブンキョウについて説明を受けた。説明が一通り終わった後は、質問を受け付けた。

この日の入会希望者はいわゆる「ニホンジン顔」、すなわち両親祖父母ともみな日系である人々が中心であったが、なかには混血、すなわちメスチッソ（女性形はメスチッサ）の男子高校生と、女子学生が1人ずつ参加していたほか、男女1名ずつ非日系（ヨーロッパ系）の人が参加しており、そのうちの一人である非日系の女性が「私は日本文化について興味があって参加した。ジャポネースはジャポネースだけで固まる傾向があるけれど、私のような非日系でも参加できるのか」と質問してきたのである。会長はこの質問に対して「セイネンブンキョウはジャポネースだけのものではない。ジャポネース以外の参加希望者も歓迎したい。今日は、ジャポネースだけではなく、あなたのような非日系の人が来てくれて嬉しい。もし、今後、活動に参加して、私たちが閉鎖的な態度を取っているように感じたら、そのときはいつでも言って欲しい」と答えていた。そして会長は、セイネンブンキョウの「文化」について、「私たちはブラジル人だけど、日本文化も引き継いでいる。だから私たちの文化は”cultura nipo-brasilreira”（英：”Japanese-Brazilian culture”）だ」と語っていた。

こうして一時間ほどで説明会は終わった。その後は、文協ビルのあるリベルダーデから5キロほど離れたところにある「ショッピング・パウリスタ」に場所を移し、軽食を取りながら引き続き自己紹介を行った。ここはサンパウロの中でも主として中流階級の人々を対象としたショッピングセンターで、特に日系人の間で人気が高い。このショッピングセンターにはカフェテリア形式のフードコートがあり、ファーストフードを中心に20ほどの飲食店がテナントとして入っている。フードコートでは、気軽に利用できるためブラジルの若者たちにはとても人気があるのだが、このショッピングセンターの近くには日系人の学生が多く通う私立学校や予備校があるため、とりわけ日系人の高校生や予備校生たちの間では人気が高い。日系人の姿は一日中見かけることができるが、特に金曜日の午後にもなると、100近くあるテーブルの半分以上が日系人の若者で占められる。よって、入会説明会希望者たちにとっても、また現メンバーたちにとっても、ここは中学や高校の頃から利用してきた馴染みの場所である。みな、アイスクリームやドリンクまたは軽食を選んで席に着き、自己紹介の続きをしたり世間話をしたりした。ショッピングセンターでの「二次会」は1時間半ほどでお開きとなった。

なお説明会では、入会希望者は住所と氏名に加え、携帯電話の番号と電子メールを各自、配布された用紙に記入することを求められた。これは、説明会参加者を把握し、名簿を作るためであるが、電子メールのアドレスは、参加者全員が受信できるメーリングリストを作成するためである。この日の参加者はほとんど電子メールアドレスを持っており、筆者以外はみな、自分専用の携帯電話を持っていた。現メンバーは、早速入会希望者のメールアドレスをメーリングリストに登録し、筆者も含めた入会希望者たちは、早速翌日からセイネンブンキョウのメンバーとして、セイネンブンキョウの活動案内をメールで受け取ることができるようになった。

以上が入会希望者のための説明会の様子である。セイネンブンキョウは月に一回開かれるこの説明会以外にも、土曜日には何らかの会合が開かれる。入会説明会の翌週からは、早速新入会員が顔を出しはじめたため、入会説明会に参加していなかった現メンバーたちはいきなり新メンバーが増えたことに対して驚いていた。メンバーの数は説明会を催すごとに増し、筆者が帰国する直前の2002年3月の時点では、会員数は70人を超え、新メンバーたちも早速、活動に入っていた。とは言うもののセイネンブンキョウの活動は強制的ではなく、あくまで本人の意思によるものである。よって、説明会に参加したあと、姿を見せない人については特に強い働きかけを行わず、あくまでも本人の意思を尊重していた。また、既にメンバーとなっている人でも仕事や学業の都合で参加できなくなることも珍しくはない。だがセイネンブンキョウはそのような人に対して、強く参加を促したりすることではなく、「参加したい人が好きな時に参加すればよい」と、非常にゆるやかであった。

一方、実際に参加を決めた人は、小委員会のなかから自分の興味や関心に会わせ最低2つの委員会を選び、積極的に参加することを求められた。セイネンブンキョウでは最低月1回は全員が集まる定例会が開かれるのであるが、これとは別に複数の小委員会が定期的に開かれている。つまり、例えば「文協バザー委員会」と「七夕祭り実行委員会」の二つを選んだ人は、定例会のような全体の会合に加え、小委員会の役員会にも参加しなければならないのである。こうして、すべてのメンバーが責任を持って会の運営に加わっていくこととなる。例えば、2月に開かれた第5代セイネンブンキョウ会長就任式では、11月に入会したSが早速最高責任者となって、就任式の準備を進めていった。もちろんこうした任務は彼にとってももちろん初めてのことである。活動歴の長いメンバーは、随時、実行委員の彼をサポートしていったが、基本的には、彼が責任者となって式典の運営を行った。

以上、筆者の経験をもとにセイネンブンキョウの活動の一部を紹介した。セイネンブンキョウが既存の日系の青年会組織と異なるのは、地域や血縁に縛られておらず、誰でも参加可能であるということである。例えば各県人会には青年部があるが、実際に参加できるのは県費留学から戻ったOBに限定される。いくら両親が県人会に参加しているからといっても、留学歴が無ければ参加することは難しい。と言うよりむしろ、両親や祖父母が県人会に加入している方が珍しい今日では、これまで「〇〇県人」という明確なルーツを持たない人は、県人会青年部のような組織には加入することができなかったのである。

また日系人の多い地域には文協（日本人会）があり、その多くは青年部を持っているが、必ずしも全ての日系人が日系人の多い地域に住んでいるとは限らない。仮に、もし家の近くに文協があったとしても、閉鎖性の高い日系社会では、誰も知り合いのいない日系団体に一人で入っていくというのはかなりの勇気を必要とする。その点、セイネンブンキョウは、誰でも気軽に参加できるように、ホームページを作成したり定期的に説明会を開いたりして、新規会員の獲得に一生懸命であった。これはコロニアのやり方としては全く画期的である。つまり、コロニアでは「口コミ」「紹介」が常であり、「見知らぬ人」の存在を過度に恐れる傾向がしばしば見受けられるのである。

メスチッソや非日系の入会希望者がセイネンブンキョウの門を叩いたことは、このような「敷

居の低さ」が大きく貢献している。つまりセイネンブンキョウは、今までの日本人会組織に見られた地縁や血縁での関係性を拒否し、『日系ブラジル文化』への関心」のみを軸として、インターネットのような新しいメディアを利用して参加者を募ったという点で画期的であると言える。

2. ASEBEX

ASEBEX（日本留学生研修員ブラジルOB会）は、ブラジルから日本に留学・研修した人々のOB会であり、前述のセイネンブンキョウと並んで、G4の一つである。会の名称は、現在はASEBEXであるが、もともとは、ASEB（日本留学生OB会）とABEX（日本ブラジル研修員OB会）という二つの会が合併してできたものであった。前者は設立に当たっては文協が関わっており、1966年から翌1967年にかけて日本留学から帰国したOBたちの、横のつながりを促進させることを目的として設立された。そして1973年に正式に会として発足し、初代会長が選出された。当初、会の主たる活動は、ブラジルに着いたばかりの戦後移住者たちが受ける2週間のオリエンテーションの講師役を留学生OBから選出することであった。しかし、日本からブラジルへの移住政策が終了したのにもない、このオリエンテーションは1980年に終了した。そして、そのころからASEBは留学前の事前研修を行うようになり、日本語の学習を含む2ヶ月間の「コウシュウカイ」²を始めた。

一方、ABEXは1980年、10～15人の元研修生たちが集まって、県連を母体として結成されたOB会であった。結成の翌年である1981年には県連から独立し、すべての日本研修生OBの融和、日本とブラジルの技術文化交流の奨励、そして一人でも多くの人々が日本で研修の機会を持てるよう、日本研修の存在を広くアピールし、そして一人で多くの研修生を送り出せるよう調査することを目標として掲げたABEXを結成した。二つの団体はともに行動する機会が多く、目的が同じであることから、91年に合併。日本への留学・研修を控えた人々のために毎年1月に「コウシュウカイ」を企画・運営することを主たる活動とし、その一方で、日本から帰国したOBたちの連帯の強化を目的とする、ASEBEX（日本留学生研修員ブラジルOB会）として生まれ変わった。またASEBEXは、留学・研修に関して活動するだけでなく、日系社会における文化的・社会的行事にも積極的に参加している[ASEBEX 2002]。

「コウシュウカイ」とは、日本へ出発する留学生・研修生たちがよりよい研修・留学生活を送るため、毎年1月から2月にかけて4週間にわたって開かれるセミナーである。読んで字のごとく、「コウシュウカイ」とは、日本語の「講習会」が語源である。しかし、彼らのいう「コウシュウカイ」は日本語でいうところの「講習会」とはかなりニュアンスが異なる。なぜなら彼らは「コウシュウカイ」を単なる日本に行くための講習としては考えておらず、参加を通して仲間づくりをすることに主眼をおいているからである。

筆者は1999年度と2002年度の「コウシュウカイ」に参加することができた。1999年は第二週から修了式までほぼ毎回参加したほか、ASEBEXが主催するその他のイベントや会合に参加した。2002年度は前述の「セイネンブンキョウ」の方の参与観察がメインであったため、コウシュウカイそのものには時々しか参加することができなかったが、1999年度に三分の二ほ

どの日程に参加していたため、おおよその雰囲気をつかむことができた。以下は、1999 年と 2002 年の筆者のコウシュウカイでのフィールドワークに基づいた記述である。

コウシュウカイは毎年 1 月に開講する。コウシュウカイを準備するのは、留学・研修から帰国したばかりの OB である。例えば、1999 年度のコウシュウカイであれば、1997 年度の留学生・研修生 OB、すなわち彼らの言うところの「センパイ」³が企画・運営にあたる。コウシュウカイの内容は、毎年大体同じである。前述の通り、筆者は 1999 年度と 2002 年度のコウシュウカイに参加したが、プログラムは前年のものをほぼ踏襲していた。1999 年度のものも 2002 年度のものも、ほぼ同じものであったのである。しかし、これは手抜きではなく「センパイ」からの伝統を受け継ぐという意味で、あえて同じプログラムを組んでいるのである。帰国した OB たちは、前年コウシュウカイの企画を経験したセンパイたちからアドバイスを受けながら、これから日本に行く奨学生たちのためにコウシュウカイを企画する。

コウシュウカイは、来賓を招いた開講式で始まる。もともと A S E B E X の前身となる二つの OB 会が、文協と県連とに密接に関わりをもっていたことから、文教や県連から会長が来賓として参加する。また県費留学・研修生の他にも、J I C A や文部省の留学・研修制度で留学する人もいるため、J I C A やサンパウロ日本総領事館の留学・研修担当者たちも来賓として招かれ、これから日本へ行く奨学生たちに励ましの言葉をかける。一通り来賓の挨拶が終わった後は、前年に留学・研修を終えた OB たちが、A S E B E X の歴史と目的、そしてこれから始まる一ヵ月のプログラムについて説明を行う。この日初めて参加した留学・研修奨学生たちは、同じ県人会同士の者や元からの知り合いであった者を除くとみなほぼ初対面であるため、座る席もバラバラであり、どこことなく緊張した雰囲気が漂っている。

二日目からは早速、具体的なプログラムが始まる。その内容は毎日日替わりであり、講師役は主としてセンパイが務めるが、内容によっては外部から講師を招く。例えば「奨学金の種類」、「成功と動機」、「自己紹介の仕方」、「日本の地理」、「日本での日常生活」といった内容の回では、センパイたちが自ら講師役を務めることになっている。そして「日本人移民の歴史」では文協ビル屋上にある日本移民資料館を見学し、館長からのレクチャーを受け、「日本のマナー」では、茶道の師範を招いて箸の持ち方などの基本的なマナーの指導を受けるというように、必要に応じて専門家が講師として招かれる。またコウシュウカイも終わりに近づくと、地域や留学・研修先の専攻分野別に分かれてディスカッションを行う。

コウシュウカイにおけるレクチャーの内容は生活に即した具体的な事柄であることが特徴である。移民史や日本の歴史などの講義は例外であるが、基本的には、学校で教えてくれる形式的な知識ではなく、生活していく上で不可欠な日常生活上の実践的な知恵やテクニックが伝達される。例えば日本語の読めない留学生にとって塩と砂糖の区別は難しいが、センパイたちは、「日本では砂糖は赤い表示で、塩は青い表示だから、どちらか分からなかったら文字や容器の色で区別すればいい」といった生活にすぐに役に立つ「とっておきの」戦略が留学・研修生たちに伝授される。つまり逆説的に言えば、日本での研究や研修に必要な日本語や専門分野の事前学習は行われないのである。

だが、留学・研修前の受講者の日本語能力は、「日本語は辛うじて聞き取れるが、話すことは困難」というレベルである。例えば「センパイ」たちは、「コウハイ」たちに対して「せっかく日本の大学から日本人のユウコが参加しているのだから、みんな恥ずかしがらずに日本語でユウコに日本の大学のこととか生活のことを聞いたら？」と筆者と日本語で話すことを勧めていた。しかし、コウシュウカイの間、奨学生たちから日本語で話しかけられることはあまりなかった。つまり、留学生の選考に当たって県の方から「応募者は日本語能力試験2級合格者以上のみ」という制限がある福岡県のような例を除くと、大半が日本語を話せないまま日本に出発しているのである⁴。

前述のように、ASEBEXの前身のひとつであるASEB（日本留学生OB会）は、出発前に日本語の講習を行っていたが、ASEBEXはそうした根本的な事前指導よりも、留学・研修生たちが出発前にネットワークを作れるようにサポートすることを第一目標としているため、研修内容がサバイバル・スキルの知識の伝達に限定されるのである。そのためコウシュウカイでは、通常のプログラムは午後7時半から9時45分までであるが、終了後は時間が遅いのにもかかわらず、できるだけみなで食事に行くことが奨励されている。これは空腹を満たすためだけではない。コウシュウカイの目的の一つである「留学・研修生同士の連帯」を実現するためである。つまりコウシュウカイは、単なる日本行きの準備というプラクティカルな側面だけではなく、コウシュウカイへの参加を通して、日本へ留学・研修する者同士が仲間意識を持ち、自発的に情報交換を行うようになることを期待しており、そのための手段の一つとして、コウシュウカイ終了後は有志で食事に行くようにしているのである。

文部省奨学生として日本の国立大学で建築学を学んだ⁵経験を持つ、ある「センパイ」は、食事会の席で「自分がコウハイとして参加したときは、昼間は会社でインターンシップをして、夜はコウシュウカイ、そしてコウシュウカイの後は食事会だったから、とにかく4週間乗り切るのは大変だった。まだ日本に行く前だったから給料は安かったし。当時の自分にとって毎晩外食することは負担だったし、帰宅も遅くて、睡眠時間は3～4時間だったからきつかった。でもこうやってみんなと食事をする、センパイから貴重な話が聞けるし、仲間もできるから、大変だったけど参加した」とみなに語っていた。

こうして4週間のプログラムが行われるのであるが、コウシュウカイの期間中は、週末に一度、1泊2日の宿泊研修がはさまれることもあって、コウシュウカイが終了する頃には、留学・研修奨学生たちの間には友情と連帯が生まれる。そしてプログラムそのものは1月下旬には終了するが、4月の出発までに、さらなる友情を深め、奨学生たちの連帯と士気を高めるために、さまざまな行事が行われる。その一つが2月下旬から3月上旬にかけて開催されるシュハスコパーティー（churrascada）である。つまり、日本滞在中、留学・研修奨学生たちが事故等に遭って緊急に金の用立てが必要になったときのための積み立てとして「基金」を作るのであるが、その資金繰りのためにシュハスコパーティーを行うのである。これは、シュハスコ(churrasco)、すなわちブラジル風バーベキューを販売することによって資金を得る一種のチャリティーパーティーであり、コロニアではしばしば資金繰りのために採られる方法である。

奨学生たちは、コウシュウカイの終了直前から、センパイたちの助言のもとシュハスコパー

ティーの計画を練っていく。シュハスコパーティーは毎年、多くの日系人が集まる一大イベントとなるため、飲み物担当、シュハスコ担当、会場設営担当、広報担当など、全ての留学・研修奨学生がいずれかの担当に所属して準備に係わることを期待されている。そのため、コウシュウカイは2月上旬に終了しても、日本への出発が4月もしくはそれ以降であっても、それまでは奨学生同士連絡を取り合い、週に何度も顔を合わせることになる。

このように、1月には全く他人同士であった留学・研修奨学生たちが、4週間のコウシュウカイを終えたころには「仲間」となり、出発までには団結することとなる。そして日本に着いてからも、彼らは連絡を取り合い、時には励まし合って留学・研修期間を過ごす。休暇中には全国各地に散らばった仲間を訪問しあうほか、夏と冬の2回、各地に散らばる奨学生たちが一堂に会し、「ケンシュウ」を行う。これは「ナツノケンシュウ（夏の研修）」「フユノケンシュウ（冬の研修）」と呼ばれる小旅行であり、海外日系人協会から補助が出ている。1999年度奨学生たちは日本行きにあたって「右をむいても左をむいてもみんな友だちさ」という日本語のスローガンを掲げたが、この言葉が語るように、彼らは、日本に出発前の事前研修から日本での生活を通して仲間意識を培っている。そして帰国してからも次の世代のために自分たちが「センパイ」たちから伝達された知恵を「コウハイ」たちに伝えることを通して、「元日本留学研修生」というアイデンティティを持つようになる。こうしたポジションは、コロニアのみならず、ブラジル社会においても有利に働く。なぜなら、帰国後は、留学・研修で学んだ知識と、帰国後は日本での留学・研修を通して形成したネットワークで、就職が可能となるからである。

A S E B E Xはコロニアの中でも、日系団体のひとつとして認知されている。そのためコロニア100周年記念委員会のような一世を中心とした公的な会合においても、セイネンブンキョウと同様に、A S E B E Xの会長は若い世代の日系人の代表として、しばしば会議やイベントへの参加や発言が求められている。またセイネンブンキョウが文協の行事に協力的であるように、A S E B E Xもしばしば、県連の行事を手伝う。例えば、毎年5月に、県連が主催する「県連郷土食祭り（festival do Japão）」では、飲み物販売や会場設営、イベントの司会進行など重要な役割を果たしている。

だが、日本から帰国した人の全てがA S E B E Xのメンバーとして活動しているとは限らない。県費留学、県費技術研修、文部科学省国費留学、J I C A日系人研修員制度⁶など、毎年サンパウロからは100人前後の県費や国費による留学生・研修生が日本に行っており、うち30人ほどがA S E B E Xのコウシュウカイに参加しているが、帰国後、コウシュウカイに関わるのは10人にもし、その後A S E B E Xのメンバーとして定期的に行事や会議に参加するのはコウシュウカイ参加者の満たないうちの1~2割程度であるが、参加はあくまでも本人の自由意志ということで、参加は強制していない⁷。

とはいうものの、A S E B E Xへの参加率は県人会青年部のそれよりずっと多い。各県人会は、県費留学や県費技術研修で日本に行った県費奨学生たちが、帰国後、県人会青年部に戻ってくることを期待しているが、実際はどの県も定着率は低い。例えば毎年5人前後の県費留学生枠を持つ福岡県人会でさえ県人会青年部への参加率は低く、会の中心メンバーは10名以下である⁸。その点を考慮すればA S E B E Xの定着率は高い方であろう。

なお、ASEBEXは留学生・研修生OB会であるが、わずかながら実際には留学や研修の経験がない人々も参加している。それは、両親が県人会に入っていないため、留学・研修に関する情報が入ってこない人たちや、非日系でありながら日本への留学・研修を強く希望する人々たちである。ASEBEXのメンバーはそうした「日本に行きたいが、どうしたらよいか分からない」人々に対して、自分たちの経験をもとにアドバイスする。例えば、父親の所属する県人会での選考試験になかなか合格できない人に対して、母親や祖父母の出身県を受験することをすすめたり、非日系の希望者には「県人子弟に限る」という条項を撤廃した県人会⁹の情報を流したりする。例えば、1999年に「日本に行きたい」という一心でASEBEXのコウシュウカイに参加した非日系の青年は、黒人であること¹⁰、そして日本語を全く話せないことから、当初、彼自身もそして周りの人々も、彼が選考試験に合格するのはかなりの困難であろうと予測していた。しかし、彼はASEBEXのメンバーのアドバイスを受けて日本語学校に入り、日本語の勉強を開始。それに並行して、非日系でも受験できる岩手県に照準を当て、岩手県人会の行事に積極的に参加した。その結果、サンパウロからは定数1名の岩手県技術研修員制度に合格し、日本行きの夢を実現させた。彼は帰国した後もASEBEXの活動に積極的に参加している。

これまで県費による留学や研修は、親や祖父母が県人会活動に熱心でなければ不可能だと思われてきた。しかしASEBEXのメンバーたちは、一人でも多くの留学・研修希望者が日本に行けるように情報を収集し、知恵を出し合っている。そして、親や祖父母の世代が、そして時には自分たちも日系人だけで固まっていたことへの反省からか、日系人だけではなく、日本への留学・研修を希望する人々に対して門戸を開いている。彼らのこうした活動は、今後、日系人に限定してきた従来の移住子弟対策事業としての留学・研修のありかたをかえるきっかけとなるであろう。

3. おわりに ——「ニッケイ」という生き方——

以上、筆者が行ったフィールドワークの結果をもとに、セイネンブンキョウとASEBEXというサンパウロにおける二つの日系青年団体の活動を紹介した。これら二つの団体は活動内容こそ異なるもの、目指すものは共通している。すなわち「ブラジル人」でも「ジャポネース」でもない、新しいタイプのエスニシティである。

セイネンブンキョウは、自分たちのエスニシティを”nipo-brasileiro”と位置づけて、肯定的な意味づけを行っている。彼らが”nipo-brasileiro”と呼ぶ「文化」は、日本やブラジルの垂流ではなく、自分たちでそうしたクレオール性に肯定的な意味を見出しているものである。例えば彼らの親世代にあたる二世は、自身のハビトゥスに日本的なものが見いだされることや、また逆に「完全な日本人」、「完全なブラジル人」になれないことに対して劣等感を抱いていたが、セイネンブンキョウのメンバーは自身のなかに二つの「文化」を受け継いでいることを肯定的に捉えて、独自の「文化」や価値観を「創造」している。

一方、ASEBEXは、日本において最新の学問や技術を学んだという自負から、肯定的な自己を形成しようとしている。前述のように、ブラジルではジャポネースとは「まじめ」「勤勉」

「知的」というイメージがあったが、彼らは民族的他者によって表象されたこのようなイメージをさらに向上させるために、日本で学んだ知識や経験を動員して自己を表象している。そしてさらには、県人会子弟のものと思われてきた従来の県費留学研修制度のありかたに対して、風穴を空けようとしている。

このように、これらの日系青年団体はともにそれぞれのやりかたで新しい「文化」やアイデンティティを「想像／創造」している。つまり、彼らは、「ニホンジン（もしくはジャポネース）でもブラジレイロでもない」という従来の否定的な日系人観を乗り越え、「ニホンジンにもブラジレイロにもなれる」という自由なポジションとして「ニッケイ」というエスニシティを構築しているということが、参与観察を通して明らかとなった。

¹本稿では紙幅の関係上取り上げなかったが、ABEUNI (Aliança Beneficente Universitaria de São Paulo) は、サンパウロの主要青年団体の一つである。1984年、日伯援護協会(援協)の学生部としてスタートした団体であり、ファベラ(スラム街)での医療活動を中心としたボランティア活動などを行っている。主たる活動としては、年に2回、1週間の日程で行われる巡回医療、通称「キャラバン」と、通常のキャラバンより短い期間の「ミニキャラバン」、そしてキャラバンのための資金集めとして、主として日系人の学生を対象とした年に数回のバイレ(ダンスパーティー)が開かれる。バイレは、企業の協賛を得て、年に3回開かれる。10月のバイレは、ドレスコードがある伝統的なフォーマルなものであるが、その他にも、2月のカーニバルや6月のフェスタ・ジュニーナのときに開かれるカジュアルなバイレがある。いずれのバイレもサンパウロの日系人大学生たちの間での知名度は高く、一回のイベントで数千人規模の動員数がある。バイレで得られた収益金は、巡回医療の際の医療機器や薬品の購入に当てられる。

²「コウシュウカイ (koshukai)」は日本語の「講習会」という単語が語源であるが、後述するように、これはポルトガル語化しており、彼らの間では独自の用法で用いられている。彼らはこの「コウシュウカイ」を単に、「日本へ留学・研修に行くための準備のために必要な事柄を学ぶ会」としては位置づけて織らず、独自の意味合いを持たせている。そこで、日本語の単語ではあるが、本稿ではあえてカタカナで表記した。

³ASEBEXでは「センパイ」「コウハイ」という言葉も、ポルトガル語のなかで用いている。これはこれから留学・研修に行く奨学生たちとOBとを区別するための呼び方であり、コウシュウカイやASEBEXにおける、ポルトガル語での日常的な会話のなかにもしばしば用いられる。彼らはコウシュウカイの受講生に対して、初日、「センパイ」の概念を「ポルトガル語のveterano(ベテラン、経験者)と同じ」と説明し、「コウハイ」をポルトガル語のnovo(新人、新参者)と説明していた。また、日本での留学や研修から帰国し、「センパイ」になっても、「センパイ」になりたての者は、より前の年の「センパイ」に教えを請う。実際、コウシュウカイは帰国したばかりの「センパイ」たちが行うが、そうした若い「センパイ」をさらにベテランの「センパイ」たちがサポートしていた。

⁴留学・研修を希望する日系人の学生たちの間では、「留学で一番難易度が高いのが国費留学、その次がJICA、そして県費留学・研修」という共通理解があるようだ。実際、県費留学でも、例えば福岡県の場合、試験の成績が1位で県への推薦順位も1位の人が、文部省の国費留学に受かったという理由で辞退し、2位以降が繰り上がったこともあった。日系人の若者たちの間では、「日本語が得意で留学したい人は文部省(文部科学省の国費留学)、長期の研修をしたい人はJICA、そこまで日本語は得意ではないけれど、それでも日本に行きたければ県費留学・研修」という理解がある。

⁵文部省(現文部科学省)の国費留学生OBは、ABMON(文部省国費留学生協会)という別の組織があるが、国費留学生の何割かはASEBEXのコウシュウカイに参加している。また、ブラジルで試験を受けて日本に向かう国費留学生の学生の多くは、大学院レベルの留学であり、県費留学を経て二度目の留学であることも多い。

⁶国際協力事業団(JICA)が実施している中南米の日系社会から研修員を受け入れる制度。1971~1996年までは、移住者子弟一般技術研修として移住研修員制度があったが、1997年度から、それまでの移住者等への支援の目的を変更し、新たに日系人を通じた中南米諸国への技術協力のための研修として、JICA日系研修員制度が実施されている。

⁷ 2002 年度 A S E B E X 会長へのインタビューより。なお、A S E B E X の会長は帰国後 2～3 年目の会員が務めるのが常である。2002 年度の会長は、1998 年の長野県県費留学生である。

⁸ 1999～2000 年度の A S E B E X 会長は、福岡県県費留学生として九州大学に留学したが、帰国後は福岡県人会の青年部には名前だけは連ねているものの、活動には積極的ではない。彼の父が県人会役員であるため、父親の説得でときどき顔を出しているが、日系団体に対する彼の帰属意識は、県人会青年部より A S E B E X の方がずっと強いように見受けられる。実際、彼は留学から帰国して既に 4 年以上経つが、毎年、コウシュウカイには参加している。また、筆者の観察では、A S E B E X の固定メンバーには彼の他にも 3～4 人の福岡県県費留学生 O B が見受けられたが、同様に彼らも県人会青年部の活動にはあまり積極的ではない。このことは県人会側も頭を痛めている問題で、留学生 O B たちが喜んで戻ってくるような県人会のありかたを模索しているところである。なぜなら、県人会としては、県費留学生を母県と県人会を結ぶパイプ役として位置づけており、将来的には、帰国後、彼らが将来の県人会を担うリーダーとなってくれることを期待して、県費留学生の予備選考を行っているからである。県側も県人会側も、留学生 O B が県人会に戻ってこないようであれば、将来、母県とのパイプが途切れてしまうと憂慮しているが、留学生 O B にとっては、県人会の運営よりも自分のキャリア形成や A S E B E X のような横のつながりの方が優先されてしまう傾向にある。

⁹ 東京都や大阪府、岩手県の技術研修制度は、応募条件から「県（または都）人子弟であること」という条項を外しているため、非日系人でも応募できるようになっている。

¹⁰ 彼自身もブラジルや県人会の人々に黒人に対する偏見があることを知っていたし、また日本においても肌の色による差別があることを覚悟していたため、仮に日本に行けたとしても、果たして日本の企業は黒人の自分を受け入れるのか心配していた。

<引用文献>

Associação Brasileiras de Ex-Bolsistas no Japão, 2002 "Almanaque do Bolsista", São Paulo
山ノ内裕子、2002 『『日系ブラジル人』のエスニシティ——ブラジル・日本におけるフィードバックから』、『国際教育文化研究』第 2 号、九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会、97-107 頁。

<参考URL>

ASEBEX (Associação Brasileiras de Ex-Bolsistas no Japão) のウェブサイト (ポルトガル語)
<http://server7.nethall.com.br/asebex/html/index.asp>
ABEUNI (Aliança Beneficente Universitária de São Paulo) のウェブサイト (ポルトガル語)
<http://www.abeuni.org.br/>
ブラジル日本青年会議所 (Câmara Júnior Brasil-Japão) のウェブサイト (ポルトガル語)
<http://www.cbjb.org.br/new/index.asp>
セイネンブンキョウ (Seinenbunkyo) のウェブサイト (ポルトガル語)
<http://www.bunkyo.org.br/seinen/index.asp>

The New Ethnicities of the Young Japanese Brazilians:

Based on the Participant Observation of the Groups of

Young Japanese Brazilian in São Paulo

Yuko YAMANOUCHI

The purpose of this paper is to examine the activities of two groups of young Japanese Brazilians—Seinenbunkyo São Paulo (*Departamento Jovem da Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa*) and ASEBEX (*Associação Brasileira de Bolsistas e Ex-Bolsistas no Japão*). Both of them are the largest active groups in São Paulo.

Seinenbunkyo is a segment of Brazilian Society of Japanese Culture (*bunkyo*), but it opens its doors not only to Japanese Brazilians, but also to anyone who is interested in the activities in/out of “*colônia japonesa*” — community comprised of Japanese immigrants and their descendents in Brazil — with other young Japanese Brazilians.

ASEBEX is the association of ex-scholarship students and trainees in Japan. One of the important activities is a four-week preparation course on studying and training in Japan. Every January, students and trainees take the course before going to Japan. They call it “*koshukai*,” which means “course” in Japanese.

The common characteristics and objectives that these groups have are their open door policy, which invites anyone to join regardless of whether they are Japanese descendents or not. Their goal is to overcome old ethnicity as “*Japonês* (Japanese)” and to create new ethnicity “*nikkei*” so as not to exclude “*gaijin* (non-Japanese descendents)”.